まぶたで会話 動画配信

妻が事故で全身不随 日記18冊体験語る

富山・松尾幸郎さん

同じ境遇 手助けに

交通事故で全身不随になり、唯一動かせるまぶたで「会話」する富山市の松尾巻子さん(67)の夫、幸郎さん(75)が7日、インターネットの動画共有サービスUSTREAM（ユーストリーム）で、事故や裁判での体験を語った。交通事故の被害者らでつくる「交通事故被害者家族ネットワーク」（東京都中央区）が企画。生放送で配信された動画は同ネットワークのホームページ（HP）で再生することができる。

【大森治幸】

巻子さんは06年、富山市内で車を運転中、センターラインを越えてきた対向車と衝突。自分で呼吸したり食事をすることができなくなった。唯一まぶただけが自分の意思で動かせる。そのまばたきを合図に幸郎さんが会話補助機上の平仮名を拾う。これが2人の「会話」方法だ。

一方、同ネットワークは事故被害者やその家族を支援するため、今年3月に結成された全国的な自助グループ。メールなどでの経験の共有▽保険会社との交渉や裁判支援▽弁護士と協力した法律相談会――などの活動をしている。

生放送はノンフィクション作家で、同ネットワークの広報担当の柳原三佳さん(48)らが「当事者の生の声を多くの人に聞いてもらいたい」と企画。8月の初放送を皮切りに、これまで娘（当時14歳）を亡くした北海道の夫婦が調書開示の必要性を話したり、長男（当時11歳）が犠牲になった東京都の男性が歩車分離信号の大切さを語ってきた。

この取り組みを知った幸郎さんが「自分の体験も話したい」と柳原さんに連絡。生放送では、柳原さんと対談した幸郎さんが事故当時の話や、巻子さんとの会話などを説明。事故後から書き記している日記が18冊になったことを紹介し「とにかく記録しておこうと思って書き始めたが、裁判で陳述書を書くときなどに役に立った」と話した。また、刑事裁判で判決の「相場」を知ったときのむなしい気持ちを吐露したり、民事裁判で感じた保険会社の損害賠償の払い渋りについても疑問を投げかけた。

机に置いた日記などを使って体験を語る松尾さん（右）と柳原さん＝富山市内で

収録後、幸郎さんは「目の前に人がいる講演とは勝手が違ったが、柳原さんと一緒でうまく話せた」と一安心。「当事者が語ることで、同じような境遇の人の手助けになったり、交通事故の抑止につながれば」と話した。

これまでの放送は、同ネットワークのHP（http://www.jiko-kazoku.com/）で見ることができる。